

(講演)

「日中」「米中」以後のアジア情勢

——リアルな分析と長期的展望・対策が必要——

中 嶋 嶺 雄

(東京 外大 教授)

中国の対越制裁行動〇

今回の中国のベトナム侵攻という事態に対して、日本人の受けとめ方は一様に大きな衝撃を受けております。しかし、ひるがえって考えてみますと、私どもがそのような形で驚いたということ、そこに一つの大きな問題があるのではないかと。なぜならば、今回の中国の対越制裁行動に関しては、すでに鄧小平が、ワシントンにおいても、東京においても、あれほどはっきりと事前に予告しているわけです。そのような予告があったにもかかわらず、いわばそれを受けとめる私どもの側に、ある種の緊張感の欠如といえますが、アメリカに行つて中国の新しい外交の第一線に立っている鄧小平が幾らベトナム制裁と言つても、まさか本当に軍事行動を起こすまい、しかも中国は「四つの現代化」という新しい転換を遂げつつあるではないかという、いわばある種の中国に対する安心感なり、逆に申すと、それはベトナムに対する牽制であり脅かしではないかとタカをくくっていたという状況があったのではないかと思います。現に政府、外務省も大変驚いたような様子であります。この事実の中に、実は今日のアジアの厳しい国際情勢に対する私どもの緊迫感の欠如を感じ

ずる。ある意味では、緊張緩和、デタントということが申されて以来の、そういう生ぬるい状況の中に私どもがいたわけですが、中国側からすれば、予定の行動を予定どおりやる。中国側が撤兵をやり出したと言われていますが、これ自体も予定の行動として中国自身は勝利の凱歌を上げるのではなかったかです。これはそれ自体として大変大きな問題を含んでいるわけですが、前提的にまずそのようなことが言えるのではないかと。今回の中国の行動を見ますと、中国自身はこれを決して敗北とはみなさないであろう。あるいは、内心これは大変困ったことである、しまったというふうに感じていても、いわゆる国際世論というものが中国民衆の間に広く行き渡っているわけでもないし、正当化することは幾らでもできるわけですね。外から客観的に見ると、中国は明らかに大きな誤算を積み重ねてまいりました。その誤算のいわば積み重ねの上に今回の行動があったのは否めないことです。軍事的に見ても、中国に果たしてどれだけ勝算があるか。むしろベトナム戦争を経て実戦の経験豊かなベトナム正規軍に、何ら実戦の体験を持たない今日の人民解放軍が立ち向かつて、果たして勝てるのかという問題もあります。私は軍事専門家ではありませんが、いわば兵器、装備その他を考えても、必

和友好条約であれほど鳴り物入りで覇権反対の条項を入れた。それは両国関係だけではなく他の地域においても覇権を求めないという相互の平和国家たらしめとする意思のもとにこの条項を入れたというのが当時の日本政府の説明であった。当然、中国に反覇権の条項に反する行為であるということを目本政府が毅然と言う、そういう態度があつて初めてあの反覇権条項というものは生きてくると私は思うんです。

それを気がねをし、反覇権が侵略かどうかと軍配を上げない。しかし、世界の至るところの戦争でおれば侵略者であると言つて始めた戦争は一つもありませんよ。みんな自衛の行動とかそれぞれ理屈をつけ合っているわけだ。それは同時に、日本に向けられたときのことも考えた場合に、厳しい態度を表明してこそ、日本政府の外交方針がきちつとしていくんじゃない



いか。それを言わなければ、結局日本というのは頼りにならぬ国、あちらに気がねをし、こちらに気がねをして信用するに足らぬ国という国際的な評価を一層深めることになるんじゃないでしょうか。中国政府に遠慮する必要はない。ベトナムに対しても厳しい注文をつけたらいいけれども、中国に對したつて、これは天下万人が見るように、あんなものは自衛戦争じゃありません。あれが自衛戦争だったら日本が日支事変を起こしたときだって自衛戦争のうちに入るいかがでしょうか。

○国務大臣(園田直君) 私は中国に気がねをしているわけでは決してございません。あくまで念願するところは、両方の平和的解決、そしていまの現状がもとに戻ることでありますから、それに対して何らかの努力をし、何らかの方法を見出したいと思う私がどちらが罪人であるかと言ふ必要はない、こういうことではありません。

○和田春生君 どちらが罪人だということを目本政府は判定を下せと言っているんじゃないんです。覇権反対の条項を落として日中和友好条約を結んでおつたというのなら、こういう質問はしないんで

すよ。日本政府のこの条項を入れた立場というものからいけば日中友好条約の中に覇権反対の条項が入つて両方サインしているんじゃないですか。だから中国に言うべきではないかと、こう申し上げている。

○国務大臣(園田直君) 御意見は十分理解しながら私は返答しておるわけでありまして、だからこそ事のいかんを問はず、理由のいかんを問はず、力をもって紛争を解決しようとし、他国に軍隊を入れることは正しくない、こういうことを言っているわけでありまして、私の意思は十分これでわかと存じます。

○和田春生君 そういたしますと、あの日中平和友好条約の中の覇権主義とか覇権行為とかいふのは、一体なんでしょう。いまの中国のベトナムに対する行為がそれに該当するかどうかということをおっしゃらないとすれば、あれに該当するような行為というものは一体どういうものなんでしょう。

○国務大臣(園田直君) 中越紛争でベトナムと中国の言い分が真つ向から反対しているわけでありまして。そこで、私は、言い得ないのではなくて、あるいは中国が覇権でないと言っているわけではあ

りません。ただ、正しくない、直ちに軍は撤退し戦をやめなさい、それから話し合いをしなさい、こう強く言っているわけでありまして、それを両方対立していることをつかまえ現時点においてどう断定するかということは、平和解決を念願している私としてはしばらくは慎んだがよからうと、私の気持ちを言っているわけで、御意見は十分わかります。

○和田春生君 外務大臣がそういう気持ちを持っているということはお話のとおりにも私も受け取つていいと思うんです。

しかし、そういうことになってまいりますと、反覇権条項を含んだ日中平和友好条約を結んだそのことの原点に返つて考えた場合、果たして本当に日本の外交的な今後の取り組みにとってよかつたのかどうかということについては、もう一遍深刻に考え直していただく必要があると思う。反覇権条項について大体ああいふものは友好条約になじまないんだから、外した方がいいというのが私たちの立場だった。ところが、それを入れ目玉みたになつたわけですからその点については日本外交の姿勢として再検討されることを望んでおきたいと思ひます。

ずしも中国に利あらず。しかもあそこの状況を地勢学的に考えても、中国にとって決して有利ではない。ましてや戦闘が長期化するれば、雨季の到来とともに中国が抜きさしならぬ状況に陥るであろうことも目に見えています。しかも今回の行動によって中国は国際世論の指弾を浴びることになってしまった。こういう状況を冷静に判断しますと、どう見ても中国にとって状況は有利ではない。その不利なことを、なぜあえて中国はやったのかという問題です。この点を、つまり中国の意思決定というものがどのようなプロセスで、しかもどういうことを大きな理由になされたのかということを、私ども十分検討してみる必要があるのではないかと思います。かつての朝鮮戦争と比較することもあるいはできるかもしれない。インドシナ半島と朝鮮半島というのは、いろいろな比較考察が可能だと思えます。あのとときも中国は、今日明らかになったと



中嶋嶺雄氏

ろによると、周恩来政務院(後の国務院)総理兼外交部長がわざわざ深夜にインドの駐北京大使を呼びまして、中国が朝鮮半島に軍事介入することをあえてリークしているわけですね。そのことは当然イギリスに伝わり、アメリカに伝わったわけですが、最近公表されたアメリカの外交文書を見ても、アメリカは実はタカをくくっていたのです。日本にいたマッカーサー司令部も、まさか中国の介入はあり得まいという形でタカをくくっていたところが、中国が実際に出てきた。そういう点では、比較、考察が可能だと思いますが、国際環境は決定的に違っています。ベトナムにソ連軍が大量に出てきて、中国が介入するというならば、その辺の比較もできると思いますが、もちろん同じ側面と異なった側面があるわけです。中国の意

思決定の背景というものを、一つは内政面、一つは国際環境の面から眺めてみることは、当然必要な前提だろうと思います。まず内政面から考えますと、今回の中国の行動は明らかに中国の失敗であり、そのことによって今後中国は大きなジレンマに陥るであろう、したがってそれを指導した鄧小平はある意味では政治的に危なくなるのではないかと、鄧小平は責任をとらされるのではないかと、ひよっとすると失脚するかもしれないというふうに、常識的にはお考えになる向きも多いと思います。しかし、私はその点は実はそれと正反対な見方をしているわけです。もちろん、今回の意思決定というものが鄧小平によって最終的になされているであろう、つまり全面的なリーダーシップは鄧小平にあることは非常に明白だと思うのです。彼自身が制裁行動と言っています。今回、中国軍隊の指導者は楊得志です。かつて朝鮮戦争のときの実戦の経験がある人物ですが、軍の中では必ずしも鄧小平系列ではないにしても、最近是非常に鄧小平の信任が厚いわけですし、その後衛にいる広州部隊司令である許世友も大変力のある軍人で、鄧小平が失脚中、広州近郊でかくまっていたほど鄧小平と仲が深い。こういうところから見ても、鄧小平が全体をやはり治めている。

確立している鄧小平体制〇

最近の中国のリーダーシップというのを見ていますと、いわば鄧小平系列ないしは旧実権派がすべての重要なポジションを握っています。そのことは、特に昨七八年十二月に開かれた三中全会において明白になったわけですし、こういう状況を背景に考えますと、やはりリーダーシップは鄧小平にある。華国鋒が今回前面に出てきて、華国鋒のリーダーシップのもとに中国の行動がなされたというならば——華国鋒は文革右派。文革左派はいわゆる四人組などとして失脚していったわけで、文革右派は十二月の三中全会で自己批判

を余儀なくされている。文革グループの凋落は著しい。そういう状況の中で今回の決断が行われているわけで、もしも華国鋒が非常に勇ましいことを言って、鄧小平がややハト派路線としてそれをなだめていくというポーズがあれば、理解しやすいわけですね。華国鋒をいま失脚させても、それ自体大変な大問題になっても、中国は鄧小平系列でばっちり固まっているから、中国自身が今後はどうなるということでもなく、そもそも華国鋒は果たして毛沢東神話が否定された今日、どれほどの実際的な政治的影響力と意味を持っているか、非常に疑わしい。そうであるだけに理解しやすいが、状況はそれとは逆なんです。ここに問題の一つのポイントがあります。そうすると鄧小平に責任をとらせようと思っても、果たして鄧小平がそういう責任をとらされるのか。そもそも中国自身はこれを決して敗北とは思いません。ですから、ある意味では、ますます鄧小平はリーダーシップを発揮しやすくなる。そういう前提を考えながら、この間の意思決定というのを見ても、実は中国内部には昨年後半、特に十一月は鄧小平が日本に来た後ASEANに行った、汪東興がカンボジアに行った。鄧小平がASEAN三カ国から帰ってきた翌日、例の壁新聞が一斉に出ました。のみならず「人民日報」なども一斉に非毛沢東化のキャンペーンを行っています。そのことも非常に密接に結びついているわけですが、鄧小平がここ数カ月、彼の体制を完全にと言っているほど形成する過程には、かなりのデッドヒートがあらわになっていく。和気あいあいと三中全会でそういう体制ができて、華国鋒が申し訳ありませんと言って頭を下げたのではない。華国鋒自身が自己批判したことを含めて、余儀なくされたものであって、そういう内部的な葛藤を経てきているということだと思います。それは鄧小平路線の確立、同時に、今日の中国の国家目標としての四つの現代化路線を全面的に推し進めるべき体制をつくった。その延長線上に彼はアメリカに行き、日本に来たという問題がある

わけでした。鄧小平としてはかなり勢いづいていきますね。その勢いづいた一つの自信というもので、ベトナム制裁というような言葉が出てきている。私はこんなふうに見るわけです。したがって、それだけに今後の問題というのはいろいろ問題を含むもので、今回のベトナム出兵の責任をとらされて、だれかが失脚するというだけで済まない問題を含むような気がいたします。中国内部には今回のベトナム作戦のものに関しては、鄧小平の足を引っ張り、彼をまともに正面切って批判するような状況はないのではないかと。最近、中国の壁新聞にはいろいろ注目すべきものがあるわけですが、この間の中国の対越軍事行動の中で二度にわたって、中国の軍事行動を批判する壁新聞が出た。もちろん、すぐに撤去されました。しかしながら、この壁新聞は党内抗争のあらわれではないかという見方がやはりありますね。しかし、私はそれも、この間の周囲の事情をよく分析してみると、ちょっと表面的な見方ではないか。今回出た壁新聞は、われわれが感じているのと同じようなことをかなり言っているわけで、中国の軍事行動は誤りである、中国はこんなことをしては誤りであるなどと言っているわけですね。こういうことを普通の人がなかなか言えるはずがない。一体だれがこういう状況の中でそれを許しているのか。これだれがこういふのは、昨年十一月中旬以来の壁新聞の中で、ひと色違った壁新聞があったということです。それは、中国には果たして民主主義があるのか、社会主義的民主が存在するのか、あるいは人権があるのかというような、非常に政治意識の高い、いわゆる近代政治意識にのっとった、いわば合理的精神のもとに書かれた壁新聞が出ていることなんです。これは従来毛沢東思想絶対のそれに対する反発という一種の状況の中で、憎悪と怨恨が織りなしたそういう壁新聞とはひと味違って、あの中国の中に、ある種の非常に近代的な意識に目ざめたグループが、地下水脈のように、異議申立て集団として存在していることを知らせた

わけです。これは反体制派というか、ソ連の反体制グループにかなり共通するような意識性を持っているのです。こういう連中が書いた、人権とか社会主義民主ということを使い始めた壁新聞の論調と、今回の中国の対越戦争に対する批判の論調と、私は意識性において非常に一致しているのだからと思う。そうすると、あのときの壁新聞は、実は今日の中国には文革否定のみならず毛沢東否定、そういう一つの司令部がある、その司令部はそういうグループを許容しているわけですね。それをまた逆にうまく利用している。今回の事態というのは、今後中国の戦略がうまくいかなくて当然予想されるであろう批判を、事前にそういうグループの壁新聞を出させることによって、いわば鄧小平体制の中に組み込んでしまふ、そういう動きではないか。あるいは今後に対する衝撃緩和の一つではないかという気さえするわけです。

日中連携に脅威のベトナム

私はむしろどちらかというところ、そういう内政を分析しつつも、国際関係上の問題が中国の意思決定を促した方がはるかに重要だと思えます。日中関係、米中関係というような、そういう座標軸の中で私どもは中国を見ることになれていきますから、その座標軸で見ると、このところ鄧小平は非常にその威信は増大し、対外的にも成功している。日本に來れば、政財界を挙げて、鄧小平、鄧小平と言ったし、アメリカに行ってもそういう状況があった。ところが、それは中国の一つの対外路線を見ているにすぎないわけで、肝心の中国の表玄関、これまで少なくとも表玄関であったところのタイなど特にインドシナ半島からASEANにかけての中国の周辺諸国を見ますと、このところ中国外交は非常に深刻な破綻、挫折を来してきたわけです。一つの大きな問題としては、昨年春以来の中越紛争があります。これは国境問題といわゆる華僑問題です。中越間と同じ社会主義国

同士でありながら、今回のような戦争を抜きにして考えても、国境、領土問題に調整がついていない。ましてベトナムとの間には南沙群島、南沙群島等々、南シナ海の重要なサンゴ礁群島があります。これはいろいろの関係から決着がついていない。したがって、この問題は何もすぐ昨春、この問題で争いが起きなくてもいい問題です。それから華僑問題ですが、確かにベトナムの革命後、非常に深刻な社会問題ですけれども、今回中国との間で衝突の材料になった華僑は、もう長い間ハノイの、いわゆる社会主義ベトナムの体制のもとになじんできた華僑であるわけですね。いまに始まった問題ではない。南の方の華僑はどうかというと、これがいまフロートピープルとして洋上をさまよっている難民なんです。私も今度オーストラリアから帰ってくるときに、ダーウィンポートからインドネシアに渡って帰ってきましたが、そこまで難民が逃げてくるわけです。これは本当にみすばらしいジャンクに乗ってさまよっている。大変な悲劇ですね。中国とベトナムの紛争は、言ってみれば、中国の戦略の中で起こった潜在的な問題がどうしようもなくなったというよりも、中国は華僑問題を利用することによってベトナムをたいたのです。なぜか。解放ベトナムのプレステージは非常に高くなっています。中国の南に、いわばベトナムの影響下の勢力ができることに対して、同時にそれは中ソ関係の上ではソ連の影響下に入りつつあるベトナムであるだけに、中国は非常に苛立ちました。ベトナムは、にもかかわらず必ずしも国内はうまくいっていただけではなく、深刻な食糧不足である。そういう状況の中で、中国は相手をたたくことによって、ここぞとばかりベトナムをすでに去年の段階でこらしたのです。たとえば中国のベトナムに対する援助は全面的にストップしました。技術者も引き揚げてしまった。昨年の七月段階を期して、すでに中国はベトナムを制裁しているわけです。こういう状況の中で、ベトナムは北からの脅威に非常に脅えざるを得なかった。

一時ベトナムの影がぐっと拡大していたのに、ちょうど昨秋ぐらいから、私たまたまASEAN諸国を回っていましたが、ベトナムの影に脅えたASEAN諸国が逆に非常に自信を取り戻して、中国の戦略は成功したかに見えたのです。ところが、そこへできてきたのが日中条約だと思えます。

日中条約も、私も日中という枠組みだけで見ましたから、今日のアジアの国際関係の中において、そもそも日中がああいう形で提携することは、いかに現状変更的なりパーカッション、影響力、その影をもたらずかということに対する見通しをほとんど持たなかった。何か一つの懸案処理であるかのように、これをやればすべての課題が終わって、すべて日本の外交が順次うまくいくような形で考えられたわけですね。ところが、今日のような状況の中で日中が提携することを、すでに北方からの脅威にさらされているベトナムはどう見るであらうか。しかもそれは覇権条項入りですから、当然今日のアジアの国際関係を大きく刺激しました。これについては、もう言うまでもありません。私がつけ加えたいのは、単に国際関係の上での中ソ対立と、そのサブシステムとしての中越関係、日中という状況のみならず、今日の中国の四つの現代化というものに対して、日本の経済力が全面的にそれをバックアップするような姿勢を、実は日中友好条約の締結以来、日本側がとったわけですね。財界はわーっと北京にラッシュした。このことはベトナムから見ると、どういふふうに感ずるのか。今日の中国の四つの現代化は、言ってみれば富国強兵策であることは明らかであって、私は「四つの現代化」と訳さなければいけないと新聞記者諸君によく言っているのですが、中国では四つの現代化、つまり近代社会中国にすることであるよりは、もっと当面の中国の戦略に必面なテクノロジーを導入するとか、そのことによってもろろん企業管理とか組織の合理化を図り、当面の中国が強くなると、国防力の増強にいくわけです。したがって日

本との経済関係の強化が中国の軍事的ビルドアップをもたらずといふふうには、常に中国から抑えられているベトナムが感じたとしても、当然ですね。ベトナムとしては耐えられなくなりました。そのときに、ソ連から長い間申入れがあったソ越条約を十一月三日の時点でベトナムは受け入れたと思うのです。もちろん、あのしたたかなトンキン人であるベトナムの今日の状況を見ても、ソ連の戦略的な影響下にベトナムが入ることについて、いろいろな考慮があったでしょう。これは将来的にも必ずしもソ連のいかいらいでは決してあり得ないわけですが、当面はこうした日中という大きなアジアの存在が上にあるしかかってきていると

Memorandum

★島田日商常務が自殺（二月一日）

ダグラス、グラマン事件の焦点となっていた日商岩井の島田常務がビルから飛び降り自殺した。島田氏は東京地検の事情聴取を六回受けており、この自殺によって事件糾明がさらに難しくなるといえる。

★ホメイニ師、帰国（二月一日）

イランの反政府運動の指導者ホメイニ師は、パリを出発してテヘラン空港に到着。熱狂的な歓迎を受ける。ホメイニ師は、バザルガン氏を首相に指名し、バクチアル政府に対抗した。

★政府、ソ連に抗議（二月五日）

政府はソ連が国後、択捉両島に地上部隊を整備、基地を建設していることに対しソ連に抗議した。ポリアンスキー駐日大使は内政干渉と反発。

★共通一次おわる（二月五日）

大学入試センターは、国公立大学の共通一次学力試験の結果を発表。平均点は六三六点、最高は九七二点、最低は〇点、標準偏差は一三四点と発表された。

★インフレ防止策へ（二月七日）

小坂経企庁長官、森永日銀総裁は土地をはじめ物価上昇に強い懸念を表明した。通産省も合戦、アルミ地金の不況カルテルは来月限りとするなど、不況対策からインフレ防止策へ転換した。

★鄧副首相、再来日（二月七日）

△鄧副首相が訪米の帰途再来日した。大平首相らと会談、両国首脳の間早期相互訪問で合意。ベトナムに制裁もとの鄧副首相の発言に、首相は自重を要請した。

★グラマン等で国会決議（二月八日）

衆院本会議でダグラス、グラマン両社の対日売り込みをめぐる疑惑の解明について決議をした。

★グラマン等で集中審議（二月九日）

きに、ベトナムとしてはどういふふうに安全保障を講じていくか。当然ソ連との関係を強化すべきであるということになったわけですね。これはソ連の側から見ると、ある意味では最初の対日報復でもあると思います。日中が締結されたときに、ソ連が日本海の漁船をすぐ拿捕するのではないかというような議論がありました。それが行われないうちに、ソ連は決して何もできないじゃないか、それ見たことかという意見もありましたが、今日のソ連は、あのしたたかな、狡猾なソ連のロシア的リアリズムからしましても、そう単純に物事を考えませんね。まさに覇権行為とみなされるようなことをすぐするほど、今日のソ連は単純ではない。非常に迂回的戦略的に、いわばじわじわとソ連の戦略というものが出てきたわけです。その第一ステップがソ越条約だったと思うのです。

連鎖反響する国際環境

第二ステップというか、これもちょうど非常に興味深いことです。今回、捉拮、国後に軍事基地がすでに強化された。このことは大変多くの問題を日本につきつけていますね。もしも次のステップとして、ソ連が齒舞、色丹まで、いま軍事基地をつくらないまでも、そこに兵員が上陸してきたとき、一体日本は何をなし得るかという問題は、すでにわれわれは考えなければいけない。にもかかわらず、たまたま昨春以来、ちょうどベトナムが中国とやり合っているときですが、そういう状況の中で、当初はかなり慎重であられた福田さんが、ある意味では、一種のマスコミに引かれ、園田さんに引かれ、ご自身の政局的な要因をお考えになったのだらうと思うのですね。徐々に日中の方向に傾斜していく時期とまさに歩調を合わせて、ソ連は捉拮、国後の基地を強化し始めたということが今日明らかになっています。そして日中条約の締結の後、昨年十月、日中フイーバーの中で一挙にソ連はあそこに軍事基地を強化したということも、

今日明らかになっていきます。これはある意味では、ソ連の対日報復の第二ステップだと私は言わざるを得ません。さて、ソ越条約があったことが、今度は逆にベトナムを非常に勇気づけました。結論的に申し上げれば、あつたときにソ越条約があったからこそ、ベトナムはカンボジアにあのよ

うな形で介入できたわけですね。もしもソ越条約がなければ、中国は国境に軍を集結していたようですし、中越国境紛争の最中、果たしてベトナムはそれほど強くカンボジアに出ることができたのかどうか。結局ベトナムは非常に高飛車になるのです。これはたまたま印パ戦争のときに、ソ印条約締結後のインドが非常に高飛車にバキ

衆院予算委はグラマン、ダグラス問題について集中審議をした。E2Cをめぐるハワイ首脳会談、E2C部品輸入などについて質疑があり、RF4 E問題も捜査と刑事局長が答弁した。

★イランでホメイニ派制圧(二月一日)

王制廃止と回教共和国樹立をめざすイランのホメイニ師派がバクテラル政権を打倒した。パザルガーン新首相は、閣僚名簿を発表。これでイランの政変は大勢が決した。

★民・公、予算修正で合意(二月三日)

来年度予算の修正をめぐって民社、公明の合意がまとまる。一兆一千億円の修正内容となった。

★航空機疑惑で証人喚問(二月四日)

衆院予算委はグラマン、ダグラスの航空機疑惑について証人喚問をした。日商岩井の植田社長、海部副社長、有森元同社航空機部長代理、郷元ダグラス社コンサルタントが出席。川部元岸氏秘書局長が出席。また参考人として海原元国防会議事務局長が出席。とくに、海部メモを中心とした政治工作が追及された。しかし有森氏は証言拒否をくり返し、郷氏はダグラス社の顧問料一〇万ドルを認めめたが政治工作を否定した。

★中国軍、ベトナムを本格攻撃(二月七日)

中国とベトナムとの関係が悪化していたが、中国軍は大部隊でベトナム国境を全面的に侵攻した。ベトナム側もこれを確認して、国連に適切な措置をとるよう要請した。

★南北朝鮮の対話再開(二月十七日)

南北朝鮮の対話再開についての朴大統領提案、北朝鮮の逆提案を受けて、南北朝鮮の閣僚級対話、板門店で三年十一月ぶりに再開。直通電話再開で合意。

★国会でソ連抗議の決議(二月二〇日)

衆院本会議は国後、捉拮両島のソ連軍事施設撤去を盛り込んだ北方領土問題解決促進の決議案を採択。参院本会議も同様の決議採択。共産克のみ、これを不服として棄権した。

スタンに、バングラデシュ独立のときに出ていったのと同じパターンだということです。結局、そういうことが今回の事態をもたらしている。それを先ほどの中国の側から見ますと、そのときに中国は結局、ポル・ポト政権を支持すると言いながら、あのベトナムの電撃的なブロンペン政略に対しては何らなすすべがなかった。非常に中国の無力というものを露呈したわけです。中国にとっても、そういう状況は大変なジレンマですね。中国に頼っているとかえって危ないのではないか、中国に一体どれだけ頼れるのかという見方が、今度はアジア諸国に出てきました。その典型的な例がクリアンサク、つまりタイであります。タイは数年前のククリット文民政権以来——もともとタイは民族的、人種的にも中国に近いわけですが、中国に対して非常に友好的、親中国的なポーズをずっととってまいりました。中国の武器がタイを経由してカンボジアへ行くことも許していたわけですね。そのクリアンサク政権はそういう中国の無力さというものを目のあたりに見せられて、第二、第三のベトナムになるかもしれないという脅威を内在的に持っているタイは、急速に中国離れを始めます。クリアンサクは日本に来て、あるいはアメリカに行つて、いわばタイへの支援を依頼する。のみならず、非常に注目されることは、クリアンサクはモスクワ訪問を発表しました。これは明らかにタイが中国離れをし始めていることの明白な証拠です。そして決定的なのは、中国の武器がタイを経由してカンボジアに行くことを禁止したことです。これは中国にとってまた非常にジレンマが深いですね。ポル・ポト政権を支援するにも、中国とカンボジアは陸続きではない。この対外的なジレンマの深さと、対内的な勢いづいた鄧小平のリーダーシップというものが結んだ。彼らはアメリカに行き、日本に行つてかなりもてはやされたという状況の中で制裁という行動が出てきたというこの連関というものを、私ども十分見ていく必要があるのではないかと思います。もちろん、一説に

はかなり確度の高い情報として、たとえばマンスフィールドがそういうことを漏らしているようですが、アメリカは今回の中国のベトナム制裁ということを中国の鄧小平から知らされて、米中間ですでに協議があったのではないか。アメリカは今回の中国の行動を事前知っていた。そのアメリカは、今後のSALT交渉その他で対ソ関係をいろいろ持っているがゆえに、モスクワにそれを漏らしたらしい。それもかなり確実である。モスクワは当然ハノイに通告するわけです。ベトナムは中国の軍隊が来るときに、すでに中国の攻撃を察知して正規軍を全部国境から内側に引いておいたのではないかというような見方もあるわけで、これもあながち否定できないと思います。それほどまでに、今日の国際環境というものは、ある意味での連鎖反響を持っているわけです。以上のことを総括してみますと、日本だけが一番おめでたい。おめでたいながら、日本は自分のとった行動がいかに重要な、アジアの現状を変更するようなアクションであったかということに対する無自覚と責任感の欠如が言えると思います。しかもその結果、鄧小平が日本で制裁すると言っているながら、まさかそんなことはあるまいとやってタカをくくつていたというところに、今日の大きな問題があるように思います。

中ソ関係の将来〇

今回の中越戦争が激化する、だれもが果たしてソ連がどこまで介入するかと考えたと思うのです。今回一番漁夫の利を得たのはソ連です。もしかすると、逆ドミノで今度はソ連が中国をたたくのではないかとみんな思っていたのです。しかし、ソ連はその辺また非常に慎重に考慮したでしょう。国防次官などの演説によると、ソ連はすでにいつでも社会主義の獲得物を守るためにソ連軍は出動態勢にある。こういうことをこの間の陸軍創立記念日でも言っていました。これはある意味での、チェコをたたいたときの有限主権論な

いしは制限主権論の考え方なんです。つまり社会主義陣営であれば自分の身内の者であるから、それはちょうど裏切り者を制裁すると同じような行動をとっていいのだという、まさに宗教戦争の趣きをほめかしていたのですね。ほめかしていながら、ソ連は時間がたてばたつほど、ソ連にとって有利であるところから、二つのことを考えた。つまり戦略的には、この機会を使ってソ連のプレゼンスを徹底的にアジアにおいて固める。したがってベトナムを軍事的にも支援する。これはソ越条約によってもう公然とできる体制になつているわけですから。現に対馬沖をソ連の艦船がどんどん通行していますね。ダナンにまでソ連の海軍基地ができるといわれる。一体カムラン湾はどうかということがありますが、こういう状況はまさにソ連はやりたくて困っていたことですから、中国があんなことをやってくれたために大手を振ってできるようになった。そうであるだけに、中国に対する行動においては非常に慎重を期するという配慮があつたと思います。だれもがソ連は中国を攻めるかもしれない、中ソ国境、火が噴くかもしれないと見ているときに、そこで少しでもソ連が不穏な動きをするということになると、これはソ連にとってはマイナスであるという判断があつたのではないかと思ふのですね。その一つの注目すべき情報は、AFPが打っている電報で、二月下旬から三月上旬にかけてまさに中越関係が危機、やがては中ソ関係が悪化するかもしれないと思われていた矢先、なんと中ソ国境では国境の小さな町で河川の航行をめぐる中ソ会談が非常に順調に行われているということですよ。これは非常に注目すべきことだと思ふのですね。私は従来から、中ソ関係というものは「中ソ一枚岩の団結」という神話があつた、その神話の崩壊の後に私どもは「永遠の中ソ対立」という神話にとらわれている、そしてタカをくくっているのではないかと申し上げてまいりました。もちろん、私自身、中ソ関係というものの持つ対立の根深さを説く

ことにおいて人後に落ちないつもりですし、先ごろ中央公論から出した「中ソ対立と現代」という本でも、中ソ関係の歴史的な亀裂の深さを、ヤルタ体制の形成過程にさかのぼって分析したつもりですが、にもかかわらず、そういう状況の中でタカをくくっていいかどうか。さて、次の問題は、中国側としても検討すべきことは、日本との間に中ソ友好同盟相互援助条約をこの四月までに廃棄するという約束をしていることです。この条約は、私は「中ソ対立と現代」の中で詳しくその経過、背景を分析しましたが、当初から毛沢東とスターリンの間に非常に意見の食い違いがあつて大変難航したのです。しかし表向きは中ソ一枚岩の団結という形で喧伝されて、実際にはアメリカもその神話にとらわれて、結局中ソ関係の本質を見抜けなかつた。したがって、いわばサンフランシスコ体制・日米安保体制、ヤルタ、ポツダム体制という大きな戦後国際秩序の枠組みの中で、片や中ソ同盟、片やサンフランシスコ体制というものが少なくともアジアにおいては形成されてきたわけです。中ソ友好同盟条約は一九五〇年二月十四日に結ばれました。調印者は周恩来とビシンスキー。四月十一日に北京とモスクワで相互に批准がなされました。実は当時の複雑な中ソ関係を反映して、実際に批准書が交換されたのは九月三十日、朝鮮戦争勃発後なんです。そういういわく因縁つきの条約ですが、四月十一日に批准されたから、その日から発効しています。三十年の期限を満了するのが来年四月十一日、もしも締約国の一方が条約の改定及び廃棄を希望する場合には一年前に通告しなければならぬ。その期限はもう間もなく来ます。一口に三十年と言ひ、中ソ友好同盟条約は反古であつた、最近の中国の言葉で言えば「名があつて実はない」と言うが、これは大変な問題ですね。ソ連はどうかというと、ソ連は絶対廃棄しないと申しています。この間ブレジネフがタイの記者との記者会見でも、ソ連としては絶対に廃棄するつもりはない、もしも、社会主義の成果であ

るものを北京の指導者が一方的に廃棄してきた場合には、その全責任は中国の指導者側にあるということを行っていますね。私は一九七五年、まだこの問題がそれほど話題になっていないときに、モスクワでソ連外務省極東第一部長のカーピツァーという中国担当で、グロムイコの下で政策決定の衝にある人と一夜話したことがありますが、彼は中ソ関係の研究員でモスクワ大学の教授ですが、いわば専門家同士としての立場から話し合った。そのときもソ連側としては絶対にその条約廃棄は考えていない。ただ、中ソ友好同盟条約は日本をいわば仮想敵国視してあるわけですから、今日の国際情勢には合致しない、日本が軍国主義的再起を遂げるという想定の上であるわけで、そういうことについては三十年前の文章は余りにも時代に合わなくなっているので、改定はあり得るということを行っていますね。今日のソ連の最大の、もう何をおいても重要な世界戦略は、実は中ソ関係の改善なんです。それはソ連は幾らでも待つし、いつでもそれに応じるという感じですね。中国はどうか。園田さんは衆参両院の外務委員会で、中国は近く廃棄するという確証を得たという報告をしていますね。それはついこの間、私も外務省のある高官に確かめた。中越戦争がこういう深刻な状況になったときに、果たして中国が日本との約束どおり廃棄するのかどうか、私は疑問である。なぜならば、ソ連が絶対廃棄をしないとやっているし、こういう状況の中で中国がいわば廃棄通告ということをするのは、大変な、まさに最後通牒をソ連につきつけるに等しい。そういう状況の中で、非常に時期が悪くなっている。中国にとって中ソ関係と園田さんとの口約束とどっちが死活的に重要であろうか。私はその点では、中国はとも条約廃棄という日本との口約束を守らないのではないかという気が始めております。私もかねがね警告は発していたのですけれども、やはり私どもは中ソ関係の将来を「永遠の中ソ対立」ということだけでタカをくくってはいけませんね。や

がていつの日かは、あれは毛沢東が悪かったのだという言い方で、中ソが幾らでも改善し得る。そのときにアジアも全部社会主義圏になつていたときに、一体日本の安全はどうなのか、一体台湾はどうなのか、朝鮮半島はどうなのかという問題はいっぱい出てきますね。そうであるだけに、私どもはこういう情勢をじっくり検討しなければいけないのみならず、たとえば中国についても、日中経済関係の強化にもかかわらず、たとえば中国は外貨準備が非常に少いでしょう。一体あれだけの外貨しか持たなくて、日本からどんどんプラントなんか入れようとするが、一体どうなのか、必ずそれは破綻するであろうと思つていたところ、今回中国から成約を中断するよいうなことを言つてまいりましたね。これに見られるように、やはり中国の将来についても、いろいろなリアルな分析をしておかないといけません。私はむしろ、中国は日本から、アメリカから当面必要なものを獲得する。支払い条件は必ず厳しくなりますね。そういうときに最後に中国は中ソ関係を改善し得るといふ、あるいはするゼスチャーを示し得るといふ、最近のはやりの言葉で言えば「ソ連カード」といふものを中国は握っているわけです。このことも十分考慮に入れた、長期的な日中関係なり社会主義国との関連というものを考えておかなければいけない。たとえば台湾だって、いまの台湾がどうあることが日本の長期的な安全保障、それだけではなく、台湾の民衆のために最もベターなのかということも、私どもはどこまで考えているのか。朝鮮半島についてもそうですね。どういう形が——南北が緩やかな協調と共存をしていくことが私は一番いいと思うのですが、そのことが日本にとって一番いい、のみならず朝鮮のどっちにとつてもいいことであるかということも十分考慮してみると、それなりのシナリオが書けるはずですね。そういうことを書かずに、思いつきのような発言を外務大臣あたりがされると、これは大変危険なことだと私は思うのです。(三月九日、文壇は編集者)

第9巻第4号 昭和54年4月1日発行(毎月1回1日)
昭和46年10月26日 第3種郵便物認可 通巻第93号

1979

4

VOL.9 NO.4

新政



新政治研究会
協和同人クラブ

時論にかえて	和	田	春	生	
講	演	中	嶋	嶺	雄
随	想	福	井	秀	政

